様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19720237
研究課題名（和文）　殖民都市「旭川」の形成と上川アイヌの社会変容
研究課題名（英文）Cultural Changes on the *Kamikawa* Ainu Society Caused by the Foundation of *Asahikawa* as Colonial City

研究代表者
大西　秀之（ONISHI HIDEYUKI）
同志社女子大学・現代社会学部・准教授
研究者番号：60414033

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治以降の上川盆地を対象として、同地域に開発・近代化が進むなかで上川アイヌの人々の既存の社会関係や社会組織が解体・再編成された結果、同地域に暮らすアイヌの人々の認知・行動様式にどのような影響が及んだか究明を試みた。具体的な成果としては、アイヌ文化の最も重要な儀礼とされる「送り儀礼」が、旭川市街の建設が急速に進む明治 20 年代前後として、儀礼の場所や担い手が大きく変容することが明らかとなった。また、この変化の背景には、「歓農政策」と「集住政策」という殖民地政府によるアイヌ社会に対する生業転換と集住化が深く影響を及ぼしていることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：This research examines the cultural change of Ainu society in the *Meiji* period. In particular, it focuses on the transition of cultural activities among an Ainu group in the central Hokkaido around the *Meiji* 20s when the Japanese colonial government pushed forward radical development and urbanization to this area and attempts to explain what kind of influences their society received from colonization by Japanese government in the modern period, and how their socio-cultural changed. The result of examinations shows that their cultural activities had changed from the traditional style and way in greater or less degree. Especially *Iomante* which is the most important and fundamental ritual in the Ainu religion had drastically changed. Results of this research show the hypothesis that these transitions before and after the *Meiji* 20s were a reflection of the colonial development and policy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,200,000	0	1,200,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	540,000	3,540,000

研究分野：生態人類学
科研費の分科・細目：文化人類学　文化人類学・民俗学
キーワード：人類学、景観、アイヌ文化、植民地、都市

１．研究開始当初の背景

アイヌの人々の社会は、ひとつの河川流域を単位とする「川筋集団」(泉靖一 1951「沙流アイヌにおける IWOR」『民族学研究』16(3-4))が中核となって、世帯レベルから地域集団レベルまでの階層的な経営がなされていた、との理解が一般的である。また、この理解は、歴史学や人類学などといった研究領域の枠を超えて共有され、アイヌの人々の歴史や文化を対象とした様々な研究のなかで参照・引用されてきた。なかでも、渡辺仁によって提唱された「アイヌエコシステム」(WATANABE,H.1972 “The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure.” University of Tokyo Press.)は、国内のみならず海外においても広く知られており、国際的に最も著名なアイヌ社会のモデルとさえなっている。だが、これら「川筋集団」や「アイヌエコシステム」に対しては、歴史性を無視した静態的なモデルであるとの批判が根強く提起されている。

ところで、人類学におけるアイヌ研究は、1980 年代以降アイヌの人々を取り巻く国内の政治的状況や人類学自体の理論的転換によって限定されたテーマにとどまってきた。これに対し、1990 年代以降、文献史学を中心とした北海道の中・近世併行期の歴史研究や発掘調査による考古資料の増加によって、歴史学や考古学などの分野では、既存のアイヌ社会像に対する大幅な見直しがなされることとなった。

しかし反面、そこでは、ひとつの課題が存在している。それは、歴史学や考古学などの最新の成果に基づいて新たなアイヌ社会像が模索されるなかで、依然として「川筋集団」や「アイヌエコシステム」といった旧来のモデルが既成事実として読み込まれてしまっている、というねじれが生起していることである。こうした状況は、研究領域ごとに成果が分断され、それらを横断的に統合しようとする試みに乏しいことが最大の要因であると考えられる。

以上のような問題意識の下、申請者は、この数年間、アイヌ社会の歴史人類学的研究に従事してきた。具体的には、平成 15 年度から日本学術振興会人文・社会科学振興研究プロジェクト事業（Ⅳ-1「千年持続学の確立」）に参加し、近世末から近代にかけてのアイヌの人々の生業活動と資源管理の変遷を文献史学者や考古学者と検討するなかから、アイヌ社会における「川筋集団」のあり方や実体性を追究した。その結果、アイヌ社会における地域集団や領有権は、外部社会の政治権力や商業資本など介入によって形作られてきたことを明らかにした。さらに、現在は、総合地球環境学研究所のプロジェクト研究（Ⅳ-4「東アジア内海の新石器化と現代化」）のメンバーとして、上川盆地を対象とした調査研究に着手している。

こうした調査研究の一環として、本研究では、明治以降の上川盆地を対象として、北海道開拓という近代化・植民化に起因する同地域のアイヌ社会の変化を読み解く計画である。とくに、上川アイヌの人々が営んだ生活実践の復元を行うとともに、その実践を支えた社会背景を明らかにした上で、北海道開拓が進むなかで既存の社会関係や社会組織が解体・再編成された結果、同地域に暮らすアイヌの人々の認知・行動様式にどうような影響が及んだか究明を試みる。

２．研究の目的

本研究の目的は、明治以降の上川盆地を対象として、北海道開拓という近代化・植民化に起因する同地域のアイヌ社会の変化を読み解くことにある。とくに、上川アイヌの人々が営んだ生活実践の復元を行うとともに、その実践を支えた社会背景を明らかにした上で、北海道開拓が進むなかで既存の社会関係や社会組織が解体・再編成された結果、同地域に暮らすアイヌの人々の認知・行動様式にどうような影響が及んだか究明を試みる。

具体的には、本研究では、上川盆地のなかでも旭川市が形成される石狩川上流域に暮らしていたアイヌの人々を主要な対象として、彼ら／彼女らが日常的に実践していた生業活動の実態とその変遷の解明を試みる。そこでは、和人開拓団に対する土地の払い下げ、狩猟や漁労に対する法規制、さらには「勧農政策」などによって、上川アイヌの人々の生計基盤が徹底的に奪い去られるとともに、近代計画都市である「軍都」旭川市が形成され、同地域の生態的・社会文化的景観が大きく変容して行った明治 30 年代後半をターニングポイントとしてその前後の変化を明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、まず本研究の対象地である上川盆地・旭川市において基礎資料・データ整備のための現地調査を実施する。この調査では、第一に上川アイヌの人々や社会に関連する文献史料等の掘り起こしを行うとともに、旭川市形成に関わる記録や地図・写真資料などの収集を実施する。また併行して、旭川市の成立前後の集落（コタン）分布や「送り場」など生業活動に関連する民具・遺物資料を分析・検討する。

ところで、本研究で対象とする近世から近代に至る上川アイヌ社会の変遷や旭川市の形成の概要については、『新旭川市史』などによって相当な部分が明らかにされている。こうしたことを加味し、既存の成果を踏まえ

た上で、同市史などの原典となった史料・資料にあたり再検討を実施する。とくに、旭川市の形成が進むなかで上川アイヌの人々が最終的に近文の給与地に集住させられるまでに注目し、それぞれの住居地・農地を割り振られた人々が本来どの集落（コタン）の出身者であり、その後どのような生業活動を基盤として生計を営んだかなどを、可能な限り当時の文献記録などから明らかにする。

いっぽう、集落（コタン）の分布や「送り儀礼場」など生業活動の痕跡については、文献史料や遺物資料から把握することが可能である。とくに、本研究では、近文給与地の前後で生業活動や「送り儀礼」の場所の分布の違いを捉えるなかから、生計戦略に関わる地理的な空間利用の変化を明らかにする。

以上のような調査研究を行った上で、これまでの収集されている口述記録や研究成果やなどから、上川アイヌの生計戦略に関わる記述を抽出し比較検討を加える。こうした比較によって、言説レベルで構築された生計戦略のあり方と、民具資料や考古資料など行動・活動の痕跡として捉えられた実践レベルのあり方との異同を確認する。この結果を踏まえ、文字記録として残されなかった上川アイヌの人々の生計戦略を復元し、それらに関わる認知・行動様式を解明するためのデータ・資料を整備する。

上記のような調査研究に加えて、次のような二つの調査研究を実施する。まずひとつは、地図や写真など過去の映像資料を基に、現在のような市街地が完成するまでの景観の変遷の復元を試みることによって、旭川市の都市形成が進むなかで失われ変容した上川アイヌの人々が暮らしていた生活環境の把握を試みる。ふたつ目は、「送り場」を始めとする生業活動の痕跡などにどんな動物や遺物が含まれているか、民具資料や遺物資料にどのような道具が含まれているかなどを分析・検討するなかから、生業活動を中心とする生計戦略の変遷の読み解きを試みる。

４．研究成果

（１）2007 年度成果

同年度は、基礎資料・データ整備という目的の下、上川盆地・旭川市において現地調査を実施した。具体的には、まず上川アイヌの人々や社会に関連する文献史料等の掘り起こしを行うとともに、旭川市形成に関わる記録や地図・写真資料などの収集を実施した。とくに、同年度の成果としては、旭川市の形成が進むなか上川アイヌの人びとが最終的に近文の給与地に集住させられる過程で、それぞれの住居地・農地を割り振られた人びとが本来どの集落（コタン）の出身者であり、その後どのような生業活動を基盤として生計を営んだかなどに関する文献記録などを収集することができた。さらに、『新旭川市史』で新たに提起された歴史的過程の基礎情報などに当たることによって、当時の上川アイヌの人びとがおかれていた時代背景や社会状況などを把握することができた。

他方、同年度は、生計戦略に関わる地理的な空間利用の変化を明らかにすべく、近文給与地集住の前後で生業活動や「送り儀礼」の場所の分布の違いを捉えるとともに、旭川市の成立前後の集落（コタン）分布や「送り場」など生業活動に関連する民具・遺物資料の分析・検討を行った。この調査では、文献史料やインタビュー記録のみならず民具資料や考古資料を比較検討することによって、文字記録や発話資料などから導かれる言説レベルと行動・活動の痕跡として捉えられた実践レベルのあり方との異同を確認することができた。こうした成果は、単に文字記録として残されなかった上川アイヌの人びとの生計活動を復元するにとどまらず言説レベルと実践レベルのズレを窺わせるものであり、当時の上川アイヌの人びとの空間利用に関わる認知・行動様式を解明するための貴重なデータであるといえる。

（２）2008 年度成果

同年度は、まず旭川市の都市形成が進むなかで変容／喪失した上川アイヌの人々の生活環境の把握を試みるという目的の下、地図や写真など過去の映像資料を基に市街地が完成するまでの景観の変遷の復元を実施した。また、この検討を基に現地調査を行うことによって、現在の市街地の形成に至る自然地理的な状況を踏まえるとともに、それぞれの場所がどのような役割の区画地域として市街化されていったかを明らかにすることができた。とくに、今回の調査では、近文給与地を中心とするアイヌの人々に割り振られた宅地や農地などが、日常生活の場としては比較的条件の悪い河川扇状地の氾濫原に位置する河岸段丘第一面であることが確認できた。こうした成果は、通常の文献史料や民族誌資料などといった文字記録や発話情報からは窺うことのできない上川アイヌの人々に対して実施された観農政策の背景であり、同研究が目的とする言説レベルと実践レベルのズレを明らかにする上で非常に重要な意義を孕むものと位置づけることができる。

他方、同年度は、上川盆地との比較を目的として根釧地域の現地調査を実施し、過去の民具資料の理解や民族誌記録の儀礼を読み解く参考とするため、現在行われている儀礼的実践の場におけるイナウの観察を試みた。この調査では、クナシリ・メナシの戦いで犠牲になったアイヌの人々に対する鎮魂として施されたイナウを根室・厚岸・屈斜路の三地域で比較検討することができた。さらに、

本年度は、アイヌ関連の収蔵資料と展示法の調査を目的として、オーストリアとスイスにおける三つの民族学博物館を訪問した。この内、ウィーンとバーゼルの民族学博物館は大規模な修復中であったため展示を見ることができなかったが、すべての博物館における資料の現状に関する聞き取りを実施した。

（３）2009 年度成果

最終年度となる同年度は、本研究の総括となる二つの研究成果を提示することができた。まず、過去の文献資料や民族誌資料の検討をとして、近世期末から明治期にかけての上川アイヌ社会における社会組織、集団構成、生計戦略などの変容を明らかにした上で、そうした変容の直接的・間接的原因となった殖民政策を始めとする政治社会的背景を究明した。次に、上川盆地における「送り儀礼」の詳細な検討を行った結果、殖民地政策による開発・入植が急速に進み「旭川」の市街化形成が開始される明治 20 年代を契機として、同地域の「送り儀礼」に顕著な変容が認められることを明らかにするとともに、そうした変容の背景にある同地域に暮らしていた上川アイヌの人びとの日々の生活実践に殖民政策・開発が及ぼした影響を読み解いた（図１）。

上記の二つの研究成果は、近世末期から明治期までのアイヌ社会の変容を、特定地域における日常の生活実践として具体的に描出したものであり、また歴史学や考古学など人類学以外の領域の研究成果を参照・統合することによって得られたものでもあることから、本研究の主要な目的を達成することができたと認識している。くわえて、本研究は、

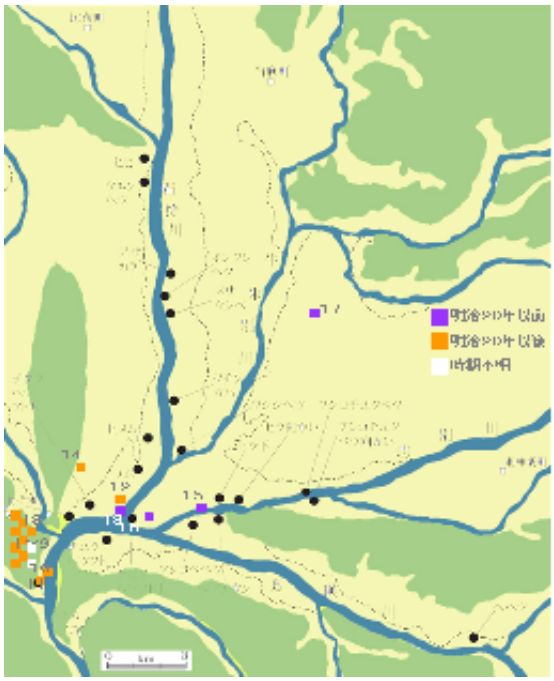

図 1：明治 20 年代前後の送り場の変容

旭川市街周辺の上川盆地に限定されるものであるが、同時期を対象とした既存のアイヌ研究の多くが必ずしも十分に検討してこなかった幕藩体制や明治政府が施行した諸政策・制度に対するアイヌ社会側の対応を部分的にでも明らかにした意義は決して小さくはないだろう。

他方、本研究では、海外の博物館に収蔵されているアイヌ民具コレクションの資料調査を行い、特にヨーロッパの４博物館では資料全点を確認することができた。同様な試みは、過去にも様々な研究機関・グループによって組織的に実施されてはいるが、1990 年代以降ヨーロッパでは博物館・研究機関の統廃合が進み状況が急変していることから、過去の調査結果の補完・修正のみならず、今後の資料調査を実施する上でも有用な基礎データを得ることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 大西秀之、環境変動と人類の適応戦略：「中世温暖期」とオホーツク文化の生物資源の利用を巡って、ビオストーリー、査読有　9 巻、2008、98-115

〔学会発表〕（計３件）

① 大西秀之、殖民都市「旭川市街」の建設と上川アイヌ社会における文化的実践の変容、生態人類学会第 15 回研究大会、2010 年 3 月 16 日、琵琶湖グランドホテル（主催：人間文化研究機構総合地球環境学研究所）

② ONISHI, Hideyuki、Formation of the Ainu Subsistence Strategy by Economic and Political Influences from the Mainland Japan 、*International Convention of Asia Scholars* 6、8, Aug, 2009、Daejeon Convention Center, Daejeon, Korea

③ ONISHI, Hideyuki、Formation of The Ainu Cultural Landscape: the landscape shift in a hunter-gatherer society 、*NEOMAP Landscape Workshop* 2008 、1, Nov, 2008 、Research Institute for Humanity and Nature, Lecture Hall

〔図書〕（計５件）

① 内山純蔵ほか（共著）、昭和堂、景観大変動（東アジア内海文化圏の景観史と環境　第２巻）、2010、印刷中

② 佐々木史郎ほか（共著）、有志社、東アジアの民族的世界：近代以前における多

文化的状況と相互認識、2010、印刷中
③ 大西秀之、同成社、トビニタイ文化からのアイヌ文化史、2009、250
④ 榎森進ほか（共著）、岩田書院、エミシ・エゾ・アイヌ：アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心として（上）、2008、193-216
⑤ 加藤雄三・大西秀之・佐々木史郎（編）、人文書院、東アジア内海の交流史：周縁地域における社会制度の形成、2008、300

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大西　秀之（ONISHI HIDEYUKI）
同志社女子大学・現代社会学部・准教授
研究者番号：60414033

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：